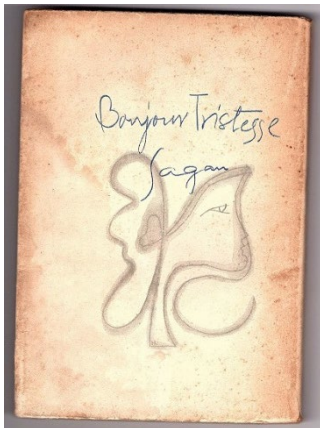


## 宮崎さん・映画編第5話「悲しみよこんにちは」の舞台

1954年フランスの作家、フランソワーズ・サガンが18歳の若さで“Bonjour Tristesse=悲しみよこんにちは”を世に出した。たちまち世界的なベストセラーとなり日本でも大きな話題を呼んだ。生活基盤が全く異なる豊かさ溢れるフランスとまだ貧しかった日本を比べ、フランスはすばらしい国だ、羨ましいというのが読後の印象であった。



1955年発行・定価190円也



哀愁を帯びた主題歌のSP版



文庫本になった小説

当時日本の職場で休暇を一週間続けて取得することは容易でなかった。法的には年次有給休暇制度はあったが、いずれの職場でも完全に消化しきる雰囲気にはなかった。フランスでは夏の暑い盛りにも2か月間も長期に休暇が取れるなど・・・想像すらし難い諸々を感じたものである。

やがて著作は1958年に映画化され、日本ではロードショーを皮切りに二流館、さらには三流館へと随分長く上映され続けた。小遣いすら十分でないのにロードショーのふかふかした椅子に体を埋め画面を食い入るように眺めたことが記憶の底にある。振り返るとこの映画は10回以上みている。今まで同じ映画を10回も観たことはない。なぜか惹かれたのである。また主題歌を歌うジュリエット・グレコの手スキーなけだるい歌声も脳裏から離れない。



南仏コートダジュール カンヌの海岸

映画の登場人物は、主人公セシル役にはジーン・セバーク、セシルの父親の愛人役は魅力的な女優ミレーヌ・ドモンジョ、上品で理知的なデボラカーはアンヌ役で登場する。パリで退廃的な日常生活を送っているセシルとやもめの父親は、パリからヴァケーションで南仏コートダジュール

映画の登場人物は、主人公セシル役にはジーン・セバーク、セシルの父親の愛人役は魅力的な女優ミレーヌ・ドモンジョ、上品で理知的なデボラカーはアンヌ役で登場する。

パリで退廃的な日常生活を送っているセシルとやもめの父親は、パリからヴァケーションで南仏コートダジュール

ル (=紺碧海岸) があるカンヌの別荘へ愛人エルザを伴って行く。やがて三人の日常にパリからデボラカー扮するアンヌがやってきて加わった。そしてついには父親とアンヌが婚約する。セシルはアンヌの立派過ぎる存在を強く意識し、父親との気ままな、これまでの生活がアンヌに主導権を握られ大きく変化するかもしれないと脅かされ、ついにはエルザを巻き込みアンヌと父親

の仲を裂くための謀を巡らす。結果アンヌは婚約まで承諾したのに裏切られた気持ちになり、血相変えて車で別荘を飛び出していく。

コートダジュールは紺碧の美しい海だが、ニース・カンヌ・モナコへと続く道路は時には目のくらむ崖淵を通る。この断崖からデボラカー扮するアンヌは海へ車ごとダイブし死んでしまう。

パリに戻りセシール親子は、また夜な夜な遅くまで互いに干渉しない怠惰な、そして退廃的な日常生活に戻る。こんなストーリーであったと記憶する。

この映画は衝撃的であった。当時はまだ日本も貧しく画面から伝わるフランスの豊かな社会を垣間見たときの驚きと羨望、さらには憧れ、先進国フランスをあれこれ想像しながらの夢見心地、魅入られたように何度も映画館に通ったのである。

画面から伝わるセシール役のジーン・セバークはボーイッシュな感じで、日本の同じ世代の女性と比較すると随分大人びた言動で日本とは違うなあと、ある種のあこがれを感じた。時を経ずしてセシールの短くカットした髪型は”セシールカット“として日本でも流行の髪型となった。

この映画で初めて知ったヴァカンスなる習慣は、日本の生活習慣とはかけ離れた羨ましい制度であった。そして映画で知ったカンヌは、文化的にも物質的にも豊かなフランスそのものの象徴であり夢の世界であり続けたのである。

あれから半世紀を過ぎ、ふと目にした旅行案内にカンヌの文字を目ざとく見つけ、かつて夢見たフランスへの思いが急に蘇り、今を逃しては訪れることがかなわないとフランスへ向け出発した。

やっと長い間の夢が正夢となり、南仏カンヌを皮切りにフランスを一巡する感無量の旅であった。

映画の舞台カンヌ。カンヌの海岸にはリビエラ（伊語で海岸）と看板が出ていた。カンヌやモナコの港に係留しているクルーザーは、江の島や葉山で目にするものとは桁が違い大型で豪華である。さすが世界のセレブが集うリゾート地南仏である。



カンヌの朝市



海岸通り



南仏はラベンダーの香りがいっぱい

カンヌもニースもまだオフシーズンというのに紺碧の海岸には老いも若きも早朝から散策する優雅な姿を沢山みた。海辺には世界的なフェスティバルであるカンヌ映画祭の会場や豪華そうなホテル、通りには有名ブランドショップが軒を連ね、なかば夢見心地で散策した。だが映画から伝わる退廃的な雰囲気を感じとるには大いに時間が不足した。





カンヌ映画祭会場



早朝から紺碧の海辺を歩きかう人々

車が山あいには差し掛かったと思う間もなく、眼下に青い海が広がる急峻な崖淵をかすめる。思わず座席にしがみつき目を閉じ体がすくむ。

それでもアンヌ役の美しいデボラカーが、車ごとダイブしたのも、ここら辺りかと胸をドキドキさせながら車窓から眺めた。



帰国してから改めて手元に残っている文庫本を読み返し、古いSP版のレコードを聴いた。心は半世紀前に立ち戻り懐かしさがよみがえる。

振り返るとサガンとほぼ同時期に日本人作家原田康子の「挽歌」が発表になり。大きな反響を呼んだ。当時は何か二人には共通した匂いを感じたものである。

(2014年)

⇔ 眼下には霧に霞む海

余談 題名の「悲しみよこんにちは」はポール・エリュアールの詩「直接の生」から採ったものだといわれている。サガンの本を翻訳した安藤次男氏訳による「直接の生」の詩は以下である。

悲しみよさようなら 悲しみよこんにちは おまえは天井の線のなかに 僕の愛する 瞳のなかに 書きこまれる おまえはまだ 根っからの あばずれ女ではない いちばん貧しい唇も おまえを ほほえみの 合図で迎える 悲しみよ こんにちは、愛すべき人々の 恋のひと 愛のちから 愛嬌をふって あらわれる そのおまえは ふわふわとした お化けのようだ へしゃげた頭をして かなしみよ、その いい顔よ